僕からきみに捧ぐ終わりの鎮魂歌。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕からきみに捧ぐ終わりの鎮魂歌。

【Ｎコード】
Ｎ４３０７Ｚ

【作者名】
津森太壱。

【あらすじ】
本に夢中になり過ぎて一週間、そろそろ眠らないと身体的にヤバいかなと思っていたノルジスのところに、竜騎士が現われた。命が危ない、とその竜騎士に言われ、いつのまにか生命の危機に立たされていたノルジスは、とりあえず話を聞くことにした。

０１　：　トーエイの森の魔術師。（前書き）

はじめましての方も、そうでない方も、読んでみようと思ってくださりありがとうございます。
急に魔王の話が書きたくなって、なんとなく書いてみました。
楽しんでいただけたら、幸いです。

01 ： トーエイの森の魔術師。

新しく作られている街の近くで暮らそうと思ったのは、活気づいている場所だからというわけではない。
なにもかも、新しく始めるのだというところに、自分と同じだという興味が惹かれたからだ。

あちこちで、木を叩く金槌の音が聞こえる。人のかけ声が飛び交っている。少し静かになったときは、職人たちが休憩を兼ねた会議を開いていて、しばらくするとまたさまざまな音が響く。
少しずつ作り上げられていった新興都市は、当初の予定より随分と大きな街になったらしい。最初は僅かだった貿易が盛んになり初めると、商業も発達してくるから、たくさんの人で溢れるようになった。たくさんの人がいるから、街を大きくしなければならなかったのかもしれない。
魔術師を呼ぼう。
誰が最初にそう言ったのか、それはわからない。けれども、大きくなった街は、もっと大きな力を持つ存在を手にしたがった。それが魔術師を呼ぶきっかけになった。
だが、新参の街に、魔術師は来たがらなかった。新しい街というのはなにかと面倒で、厄介なことが多いからだ。希有な存在である魔術師にしてみたら、そんな面倒ごとに首を突っ込むくらいなら国の官吏として一生を安泰して過ごしたほうがいいと考える。
人々は考えた。
繰り返し協議がなされた。

そうして、誰かがまた言った。
トーエイの森に暮らすあの青年、あれは魔術師ではないのか。
新興都市のすぐ近く、トーエイの森には青年がひとりで暮らしていた。その彼が魔術師ではないかと、誰かが言い始めたのだ。
話はあっというまに広がり、ただの憶測でしかなかったそれは確信された話となり、トーエイの森に住む青年は連行されるように新興都市へと引き摺られていった。
しかしながら、その青年は確かに、魔術師だった。それもとびきり優秀な魔術師だ。
魔術師を街へ招くことができた人々は喜んだ。三日三晩、宴を開き続けるほどに喜び勇んだ。
けれども。
とびきり優秀な魔術師は、人々の想像を遥かに超え、あまりにも優秀過ぎた。なにかを作る知恵を求めれば、ぽんとあっさり知識を差し出し、あれが欲しいのだがどうにかならないだろうか、と相談すれば、その場で欲したものを具現化させてみせた。天候がひどいときにはそれを操って回避させ、獣の被害が出ればひとりで対処してみせた。
最初こそ魔術師であった青年を敬っていた人々だったが、その人外の力にだんだんと恐れを抱くようになった。
また誰かが言った。
あれは、魔術師ではない。バケモノだ。悪魔だ。いやきっと魔王だ。
誰かの言葉で、青年は都市を追われることになった。
けっきょく新興都市は、それからは魔術師を迎えることなく、静か年月を重ね古参の都市となった。

眠気を誘う陽気に、あふりと欠伸をする。このまま眠ってしまっても問題はないが、今読んでいる本の続きが気になって、それもできない。

「ノぉールジぃース、お昼だよー」

どこからともなく聞こえてきた遠い声に、また欠伸をする。

「んー……そこらに出しといてー」

返事をすると、強い眠気に負けまいと目を擦りながら、なおも文字を追い続ける。

「ノルジス？　昼食だってば」

今度は近くから声がして、ノルジスは仕方なく本から顔を上げた。

「聞こえてる」
「返事くらいしてよ」
「した」
「聞こえなかった。ほんとに返事したの？」
「したよ」
「ほんとかなぁ……。お昼だよ」
「はいはい」

食欲よりも眠気のほうが優っているのだが、それは許してもらえないだろうなと、ノルジスは読みかけの本に栞を挟んで閉じた。そうすると自然、香ばしい匂いに気づく。

「なんの料理？」

「レヴンがくれたお米が収穫できたから、教わった通り炒めて炊いたの。けっこう上手くできたよ」

「おこめ？」

「稲穂の実だよ。東のほうで育てて る土地があるでしょ？　そこから少し苗を分けてもらったからって、レヴンがくれたの」

「それ、だいぶ前の話と違う？」

「だって育ててたもん。大変だったんだよー」

時間をかけて育てたという稲穂の実が、本日の昼食らしい。さて米とはどんなものだったかな、と首を傾げながら、ノルジスは本を机に置くと椅子を離れた。

食堂に移動し、卓に広がった昼食を見て「おお」と少し驚く。

「美味しそうだね」

匂いからしてそうは思っていたが、見ためからもその雰囲気が伝わってくる料理が並んでいる。

「お米って、炊くとご飯になるんだって。で、レヴンに教わったのは炊き込みご飯。細かく切った野菜と一緒に炒めてから炊いたの」

美味しいはずだよ、と自信ありげに言うので、これは期待できる料理なのだろう。

席について、いただきます、と両手を合わせてから、炊き込みご

飯だという昼食に手をつけた。

「ん。少し塩気が足りない気もするけれど……うん、美味しいね」

「塩はわざと控えたんだよ。でも……控え過ぎたかも」

ちょっと失敗したかな、と落ち込むので、初めてにしては上出来だと褒めておく。

「これ、また食べられる？」

「うん。けっこう収穫できたから、しばらくは食べられるよ。気に入ってくれた？」

「硬い麺麭よりこっちがいい」

「じゃあ頑張る」

今度は上手に作るよ、という言葉に、微笑んだ。

炊き込みご飯を主食にして昼食を終えると、食後のお茶に一息を淹れる。

「そういえば学校はどうした、セヴン？」

「ノルジスが本を読み耽ってる間に試験も終わって、休みに入ったよ」

「おやまあ……僕、どれだけ本に集中してたのかな」

一週間くらいかな、と言うセヴンに、「あら」と顔が引き攣る。どうりで眠気がひどいわけだ。

「眠ってもいいかな？」

「いいけど、三日くらい眠り続けるのはやめてね。寝ぼけてるノルジスに食事させるの、けっこう大変だから」

「眠ってるときに無理やり食事させてるの？」

「だって飢えるでしょ」
「だいじょうぶだよ、三日くらい。一月くらい食べなくても平気だし」
「だめ。身体に悪いよ」

必ず食事を摂らせるセヴンに苦笑しつつも、読みかけの本が気になるので、読み終わってから三日くらい眠ろうと決め、ノルジスはお茶を呑み終えると食堂を出た。

「眠るなら寝台にしてよー？」
「わかってるよ」
「椅子は寝台じゃないんだからねー？」
「それもわかってる」

転寝はしても熟睡はしない、と宣言して、読みかけの本を置いている自室へと戻る。
その途中の廊下で、開けられた窓から入り込んできた風に足を止めた。

「……セヴーン」
「なぁーにぃー？」

狭い家だから、少し声を大きくすれば台所にいるセヴンに声が届く。セブンの声も、廊下にいるノルジスに届く。

「きみ、今日は学校に行ってないんだよねえ？」
「行ってないよー。だって休みだもーん」

セヴンはまだ学生だから、昼間は学校に通っている。だが試験休みに入っているので、今日は学校に行っていない。学校に行ってい

ないということは、街にも出ていないということだ。
おかしいなぁと、ノルジスは風が入り込んできた窓から外を見やる。

「なに、どうかした？」

セヴンが片づけの手を休めて、廊下に出てきた。

「街に出かけた？」
「出かけてないよ。お米の収穫してたもん」
「なら、レヴンに逢いに行ったりした？」
「行ってないよ。今日はレヴン、急ぎの用事があるって言ってたから。なに？」

おかしいなぁと、ノルジスは首を傾げ、セヴンに窓の外を見るよう促す。

「あれ、なにかな」
「ん？　……、うわあっ！」

窓の外を見やったセヴンは、驚きに目を見開いて声を上げた。

「なんで竜騎士がいるのっ？」

それはこちらの台詞だ、とノルジスはセヴンを見やる。

「きみが連れてきたんじゃないの？」
「なんでおれが！」

違うよ、と否定するセヴンに、ノルジスは唇を歪める。

「尾行されたりしなかった？」
「されたらわかるよ！　だっておれ、ノルジスのところにいるんだよ？」

尾行がわからないわけがない、と自信たっぷりにセヴンは言う。しかし、セヴンには少し抜けたところがある。その性格を知っているノルジスとしては、おそらくこの事態はセヴンの気の緩みが原因だろうなと思った。

「竜騎士かぁ」

窓の向こうに見えるのは、今まさに竜の背から降りた騎士がいて、ノルジスを視界に捉えている。目を逸らそうとしない竜騎士に、目的は僕かな、とノルジスはため息をついた。

「なんで今さら来るかなぁ……」
「え、知り合い？」
「違うよ」
「なら、どういう意味？」
「僕がここに不可侵の結界を張っている理由」

竜騎士を招かないようにするためのもの、つまりはどこかの国からの使者が来られないようにするための目暗ましの結界が、ノルジスの家を囲んでいる。簡単な結界なので、この家から学校に通うセヴンを尾行すれば、呆気なく破れてしまうものだ。

「おれのせい？　でもおれ、尾行なんてされてないよ？」
「されたと思うよ。僕は家から出ないからね」
「……、ごめんなさい？」

「そうだね」

素直に失態を謝るセヴンの頭を撫でたとき、こちらから視線を外さなかった竜騎士が歩を進めた。

「トーエイの森に住まう魔術師どの、だろうか」

凛とした声に、やっぱり目的は僕か、とノルジスは肩を落とす。

「僕はべつに、森に住んでいるわけではないんだけどね」

「だよね。ノルジスは閉じ込められてる」

「それ、なんて言うか知ってるかい、セヴン？」

「封印でしょ？　あっさり破ってるけど」

くす、と笑ったセヴンが、ノルジスの肩に並んで立ち、ノルジスのほうに声をかけた竜騎士に笑いかける。

「ノルジスになにか用？」

セヴンに問われた竜騎士は、立ち止まることなく窓の近くまで来る。くすんだ赤い髪と、澄んだ紅い瞳に、ノルジスは懐かしさを感じた。

「話を、聞いてもらいたい」

そう答えた竜騎士に、セヴンが一笑する。ノルジスは、呆れた空笑いしか出なかった。

「ノルジスに話って、なにそれ」

嘲笑うように、セブンが言った。

「勝手なのは承知だ」

「じゃあ断られても仕方ないよね。帰ってよ。そして二度と来るな。ノルジスはあんたらの話なんか聞かない」

「悪い話ではない。聞くだけでも……」

「いいから、帰りなよ」

問答無用なセヴンに、竜騎士は少したじろいだが、諦めることはなかった。

「頼む。わたしの話を聞いて欲しい」

「だから聞かないって。帰って、竜騎士のお姉さん」

セヴンは抜けたところもあるが、けっこう容赦ない性格をしている。諦めればいいのに、と他人ごとのように見ていたノルジスは、しかしふと、首を傾げる。

「おねえさん？」

どこにそんな人がいただろう。

「え、ノルジス？」

「セヴン、おねえさんって？　どこにいるの？」

「……僕、竜騎士のお姉さんって、言ったよね」

「竜騎士の……えっ？　そっち？」

凛々しい姿にうっかり男だと思っていた竜騎士は、どうやら女性のようだった。

「ツヴァイ・ファインと言います、魔術師どの」
「あ、ちょっと、なに自己紹介してんの、竜騎士のお姉さん」
「魔術師どの、どうかわたしの話を聞いて欲しい。悪い話ではないのだ」
「無視しないでよー」

矛先をセヴンからノルジスに向けた竜騎士、ツヴァイ・ファインと名乗った彼女は、真っ直ぐな紅い双眸でノルジスを見つめてくる。よくよく観察すると、確かにツヴァイは男ではなく、女性だ。全体的に丸みがあって柔らかそうで、しかし竜騎士なだけあってしなやかな体つきをしている。

「うん、好み」
「はっ？　ちょっとノルジス！」
「ん？」
「女好きも大概にしてよね！」
「失礼な。おれは人間が大嫌いだよ」
「女は大好きでしょ」
「女が嫌いな男はいないなぁ」
「たらし！」

やめてよね、と文句を言うセヴンに笑って、ノルジスはきょとんとしたツヴァイに視線を向ける。
ああ、やっぱり紅い瞳は懐かしい。

「僕はノルジス。トーエイの森に住み着いているわけではないから、ただのノルジスと呼んでくれていい」
「ちょ、ノルジス！」
「で、この子はセヴン。おれの……まあ息子かな」
「養育する義務がある息子だよ！　なにその過去の過ちを認めたく

ないっていう雰囲気！　って、そうじゃなくてねえ、なに自己紹介してんの、ノルジスってば」

ぎゃいぎゃい言うセヴンの頭を撫でて落ち着かせると、ノルジスはツヴァイにっこり微笑みかける。

「わざわざ来てもらって悪いんだけど、僕、話を聞く気はないから。悪い話じゃなくても、いい話でも、どちらでもね」

「あなたが魔王だというのは本当か」

「ぅおっと……」

話を聞く気はないと言ったばかりなのに、無理やりにでも聞かせる気だ。しかもその話題だ。なかなか強気に出てきてくれた竜騎士に、少しだけわくわくしてしまうのは許して欲しい。

「もしそうならば……頼む、今すぐここから逃げてくれ」

「……、はい？」

「あなたの命が危ない」

「僕の命？」

悪い話ではないと言ったくせに、まるっきり悪い話ではないか。これはちょっと、きちんと竜騎士の話を聞いておくべきではなかろうか。そう考えていると、セヴンが目で訴えてきた。

「ああはい、話を聞いておこうか？」

「違う！　厄介ごとから逃げろって訴えたの！」

どうも息子との触れ合いはいまいち上手くいかない。そう思っているのは、ノルジスだけかもしれないが。

「まあ聞くだけ聞いてもいいかな」
「ノルジスのあほ！」
セヴンがなにか言っているけれども、軽く無視して、とりあえずお茶をお願いした。

０１　：　トーエイの森の魔術師。（後書き）

誤字脱字、そのほか怪文書がありましたら、ひっそりこっそり教えてください。

読んでくださりありがとうございます。
とりあえず勢いだけで書いたのですが、楽しんでいただければ幸いです。

津森太壱。

02 ： トーエイの森の魔王。

「つまり……勇者が、召喚されたと？」
「はい、そうです」

ツヴァイの話は簡単だった。
トーエイの森に封印されているはずの魔王が、最近になって封印を破り表に出てきた。魔王についていた者たちは、これ幸いと再び悪行を重ね、世界は魔に溢れようとしている。魔王はそれを高らかに笑いながら眺め、かつて自分を封じた者を殺してやろうと今捜しているらしい。だから世界を代表した神殿が、勇者を召喚したとのことだ。
なんて安易な話だろう。

「この森に魔王っていたの？」

セヴンが、本気で「そんなのいた？」的な顔をしてノルジスに訊いてくる。
訊くなよ、と言いたい。

「この森にいるのは、昔も今も、僕だけだよ」
「だよね？　ノルジスしかいないよね？」

どこに、魔王、とかいう人物がいるのか。セヴンは、わざとではないだろうが、きょろきょろと大袈裟に周りを見渡す。

「魔王って……随分と昔の言葉だと思ったけどなぁ」
「年寄りみたいな言い方するね、セヴン」
「明らかにノルジスの息子だから安心して」
「え、なにを安心すればいいの」
「おれはノルジスの息子だから」

ちょっと前に、「まあ……息子みたいなもの」と言ったのを、かなり根に持たれてしまったようだ。冗談だったのに、こんなときに限って本気に捉えるから、この息子はちょっと可愛い。

「だったら、パパって、可愛く呼んでくれてもいいのになぁ」

ついでに眠りから起こすときも、可愛らしい微笑みで優しく起こして欲しいものだ。寝台から叩き落とす、全裸にさせて放置する、いきなり風呂に突っ込む、とか、可愛くないったらない。

「呼ばれたくないってノルジスが言ったんでしょ」
「あれ、そうだった？」

セヴンとはずっと一緒にいるせいか、いちいち日常の言葉を記憶しておく必要がない。だから、随分と前に言ったことなどすぐに忘れてしまう。

「おっと……話が反れた。魔王と勇者だったね、今は」

脱線してしまったのを軌道修正すると、さすがに親子の会話には目が点になったツヴァイがいた。

「本当に親子……？」

うっかりとそう呟くくらいには、呆気に取られていたらしい。
「紛れもない親子だよ。レヴンもいるから、ノルジスってば実は二児の父親です」
「そ……そうですか」
「似てない？」
「ま、まあ……」
「それはよかった」
「え？」
「ノルジスみたいな女好きにはなりたくないからね！」
「は？」

それはちょっとひどいな、とノルジスは口を挟んでおく。

「僕は女性が好きなだけで、人間は嫌いだよ？」
「なんであれ女であれば態度変わるじゃないの」
「女性と子どもには優しく。そう教わったからね」
「このお姉さん、竜騎士だからね？　女というより騎士だからね？」
「最近の女性は逞しいねぇ」
「女騎士は昔から存在してたよっ」
「え、そうなの？」
「ノルジスってどこまで記憶力悪いのっ？」

頭はだいじょうぶかと、乱暴に揺すられて目が回った。
忘れられているようだが、ノルジスは一週間ほど眠っていない。
そろそろ眠気に負けそうなほど、体力がない。

「あ、ちょっと死んでいい？」
「ああごめん」

軽く謝られた。
「あの、話を……いいでしょうか」
「そうそう、脱線してしまったね。魔王と勇者の話をしなくては」
本題を大いに忘れかけていた。
「トーエイの森にいる魔王を倒すために、勇者が召喚されたのだったね」
「はい、そうです」
「この森に勇者が必要な存在はいないんだけどねえ？」
「そのように、見受けられます。ですが、わたしがこの森に入る際、確かに今までになく魔が多く見られました。わたしは竜騎士ですから、それほど困りませんでしたが」
「きみ、そういえばどうやって森に入ったの？　僕はこの森に不可侵の結界を張っていたのだけど」
「ふつうに入れましたが？」
「ここにもふつうに来れた、と？」
「はい」
ふむ、とノルジスは唸る。
どうやらツヴァイを招き入れたのはセヴンではないようなのだが、だからといってツヴァイが入って来られるような安易な結界でもない。いくら破るのが容易い結界でも、セヴンの姿を見ずして破ることは敵わないのだ。
とすると、犯人はセヴンではない。
「レヴンか」
「レヴンがなに？」

「僕の結界を壊していったようだね」
「ああ、確かにレヴンなら壊すかも。けっこう乱暴者だからね」
セヴンがちょっと抜けた性格なら、兄のレヴンはちょっと抜けた乱暴者だ。その怪力が尋常ではないと、いつになったら気づいてくれるだろう。

「もしかして、魔王の正体もレヴンだったりしない？」
「まあ可能性的には大いに。レヴンの印象なら、魔王に見間違えられてもまあおかしくないからね」
「あほ兄貴捕まえてこようか」
「そうだね。とりあえず捕まえておいで」
「はーい」

ちょっとそこまで行ってくるよ、という軽いノリで、セヴンは行ってしまう。もちろんそれくらいのノリで充分な成果を得られるから、問題はない。

「え、あの……ノルジスどの？」
「ノルジスでいいよ。とりあえず魔王もどきをセヴンが捕まえてくるから、話を進めておこうか」
「はあ……しかし、その、だいじょうぶですか？」
「なにが？」

どうも呆気に取られ易いツヴァイは、しかしノルジスとセヴンの軽さについていけないだけである。
ノルジスが首を傾げると、きりっと表情を改めた。
「先にも言いましたが、今この森は魔に溢れています。この家の周囲だけ不思議なことに安全なのですが、だからこそ、一歩でも外に

出たら危険です。セヴンどのをおひとりで行かせてしまうのは……」

ツヴァイは、自分の経験からセヴンが危ないと、心配してくれているらしい。

ノルジスはにこりと、微笑んだ。

「セヴンを心配してくれてありがとうね」

「え……は、いえ、わたしは竜騎士として見過ごせなかっただけで」

ノルジスの笑みに少し頬を赤らめたツヴァイは、それでもちらりちらりと背後を見やり、セヴンを心配してくれる。

けれども、とノルジスは暢気に、セヴンが淹れていってくれたお茶を啜る。

「あの子はこの森から、麓の都市にある学校に通っている。歩き慣れた森だから、だいじょうぶだよ。それに……可哀想なことになるのは、魔のほうだからね」

「は……い？」

「僕のセヴンに手を出す魔なんて消滅すると思うよ？」

「しょ……消滅」

にこり、と笑みを深めたら、なぜだろう、ツヴァイが顔を引き攣らせた。

「あれ？　僕、なにか変なこと言ったかい？」

「い、いえ！」

「ああごめんね？　ここ数年、十数年かな、話し相手がセヴンとレヴンだけだから、ちょっと言葉がおかしいかもしれない。記憶も曖昧だからね」

「お気になさらず！」

「そうかい？」
「はい！　それより、魔王に御心当たりがあるようですが！」
急に硬くなったツヴァイに、さてどうしたのだろうと思いながら、なにもないそこを叩くように空を指差す。
「噂を、聞いたことがないかな」
「どのような噂でしょう」
「真っ黒な竜騎士が空を横切る噂」
「それは……」
思い当たる噂があるのだろう。ツヴァイは少し思案して、彼女の国で聞く噂を話してくれた。
「悪くもなければ、好いわけでもないのですが……親が子に聞かせるものとして、黒い竜騎士の話があります。悪さをすると黒い竜騎士が地獄へと連れて行くぞ、と」
「ふぅん？」
「随分と昔から存在する子どもへの戒めですが、それがここ数年、本当に黒い竜騎士が空を飛ぶようになって……滅多に見かけませんが、だからこそ、悪いことが起きそうだと、人々は恐れています。そういう噂でしたら、耳にしたことはありますが？」
うん、とノルジスは頷く。まさに、それだ。
「それ、僕のもうひとりの息子ね。よろしく」
「そうでし……、はっ？」
面白いくらい驚いてくれて、こちらとしても満足だ。ころころと表情が変わる竜騎士でよかったと、つくづく思う。

「それがレヴン、セヴンのお兄さんだよ。レヴンの竜は黒竜だから、ついでのように自分まで黒づくめになっちゃうような、ちょっと残念な子でね。せっかくきらきらした容姿に作ってあげたのに、なんで台無しにしちゃうかな？　黒竜をあげたのがいけなかった？　銀竜をあげたらきらきらしてくれたのかな？　まあとにかく、残念な子なんだよ」
「は……はあ」
「セヴンはその点、ちゃんときらきらしてくれているからいいけど。ほら、僕って髪も目も真っ黒でしょ？　きらきらすることって、たまに瞳が銀色になるくらいで、ふだんは一つもきらきらしないわけ。だから子どもたちにはきらきらした要素をあげたんだけど……レヴンはどこで失敗したのかな」
「……わ、わたしが言うのも、おかしいかもしれませんが」
「うん？」
「その……育て方を間違えられたのでは？」

ハッとした。

「僕が悪いのかっ！」
「いえそういうわけではありませんが！」

そうか、とノルジスは項垂れる。
ツヴァイに指摘されるまで気づかなかった。どうやら長男の育て方を、間違えてしまったらしい。いや、だからこそ次男のほうにはきちんと、レヴンのようにはならないようにと気をつけることができた。おかげでノルジスの望みどおり、セヴンはきらきらとした淡い金髪を、さらさらと太陽にかざしてくれる。いつだってそれは目に優しい。瞳も、琥珀色の双眸は太陽の光りで優しく輝く。

「セヴンはきちんと育てられた気がする、うん」

あまりのきらきらに恨めしくなるときもあるが、まあそれは置いておく。自分が真っ黒だという残念さに拍車がかかるだけだ。

「……ノルジスどのの、それは、本物ですか？」

「ノルジスでいいってば。それって？」

「では、ノルジス。その、髪や瞳の色、です。真に、漆黒なのですか？」

紅の色を持つツヴァイには、ノルジスのこの色は珍しいかもしれない。いや、この世界的にも珍しいだろう。

「忌み子」

「はい？」

「僕が、忌み子であるか、そう訊きたいんだろう？」

ふう、とノルジスはため息をつき、しかし口許には笑みを浮かべたまま、腰かけていた椅子に深く座り直した。ツヴァイは、口を噤んだようだ。

「そうだよ、僕は忌み子だ。誰からも嫌われる。人間に好かれたことなんて一度も……ああいや、一度だけあったかな。魔術師として、僕は都市に呼ばれた。あの頃は若かったからね……乞われたらなんでもしたよ。喜ばれることが純粋に嬉しかったからね。けれど……長くは続かなかったなぁ」

もう忘れたと、思っていたけれど。

思い出してみれば、意外にも記憶は蘇ってくるもので。

楽しかった気持ちも、嬉しかった気持ちも、そして悲しかったり

虚しかったり、憎く思ったりしたことも、すべて思い出すことができる。

「……あなたは、本当に、トーエイの森の魔術師でしたか」
「住み着いているわけではないけど、そこは否定しなかったでしょ」
「では、あなたは……」

顔色を白くしたツヴァイに、やっぱりそういう顔をするのかと、少し残念に思いながら、しかし嘘をつけるほど優しい性格ではないノルジスは、はっきりと告げる。

「魔王と、呼ばれたこともあるよ」

かちりと、ツヴァイの腰にある剣が、小さな音を出す。

「セヴンやレヴンには、内緒。父親が魔王なんて……あの子たちが笑って喜ぶだけだからね」
「……、は？　あの、そこは悲しむのでは？」
「突っ込めるようになったね、竜騎士さん」

いい成長ぶりだ、と笑うと、ツヴァイがまた顔を引き攣らせた。

「話がまた反れてしまったね。とにかく、僕に心当たりがある魔王は、僕の息子だから。しばらくおとなしくさせるから、それでいいでしょ？」
「今あなたが自ら魔王だと名乗りましたが」
「いやだなぁ、それは場の雰囲気だよ。それにほら、魔王のイメージって黒なんでしょ？　僕って忌み子だから、それに該当するんだよね」

きらりと、ツヴァイの目が光った。
「今、わたしの耳に理解できない言葉がありました」
「……わぉ」
しまった、と思ったが遅い。誤魔化そうと思ったのに、よくもまあ短時間でここまで成長してくれたものだと、ノルジスのほうが今度は顔を引き攣らせた。
「いめーじ、とは、どの国の言葉でしょう」
ここで笑って誤魔化せるだろうか。できなかったら、自分は彼女に、斬られることになるのだろうか。いやしかし、ツヴァイは「逃げろ」と言っていた。「命が危ない」とも、言っていたではないか。
ツヴァイにその気はない。理由は知らないが、トーエイの森にいる魔王を殺すつもりは、彼女にはない。
目的はなんだろう。
今さらだが、ノルジスは首を傾げた。
「あなたが、魔王なのですね」
「……セヴンとレヴンには黙っていてくれる？　いやあのね、あの子たち、本気で喜ぶから」
「あなたが忌み子として嫌われ続けたのなら、あなたの御子である彼らは、確かにあなたが魔王であることに喜ぶでしょう」
「竜騎士さん、実はものすごく頭の回転が速いね？」
「あなた方の軽さに気を取られたのは事実です。まさか、こんなに軽いお方が魔王だとは、思いもしませんでしたので」
なにが悪かったのだろう、と考えてみる。
一つ言えるのは、起きた時期が悪かっただけ、だろう。そして、

起きてすぐ一週間も起き続けたのもいけなかった。本になど夢中にならないで、さっさと眠ってしまえばよかったのだ。そうして、またいつか起きる。その生活を、セヴンとレヴンに護られながら、永遠に続けていればよかったのだ。

「休眠があるって、便利なようで不便だね」

はあ、と諦めにも似た肯定をツヴァイに見せると、ちょうどよく空に、黒い影が降りてきた。

「父になにしてるか、竜騎士！」

「……ちょっと片言に聞こえるのはなぜかな、レヴン」

「父から離れろ、ちゅうきち！　あ、噛んだ」

「噛み過ぎだよ」

いったいどれだけ人と触れ合わない生活を送ったのか危ぶまれるレヴンの声に、ノルジスは笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4307z/

僕からきみに捧ぐ終わりの鎮魂歌。

2011年12月15日00時50分発行